

平成 25 年 2 月 28 日

これからの附属図書館

— 中央館改修後の基本的な運用計画 —

熊本大学附属図書館

附属図書館は、「熊本大学の理念に基づき、教育と研究活動を支える学術情報基盤としての不可欠な資料を収集・保管し、学内外の利用者に対して、効果的に提供することを目指す」という理念のもと、教育支援、学習支援、研究支援、社会連携、国際化、情報発信のそれぞれに目標・計画を掲げ、その達成に向けて努力しているところである。

現在、附属図書館は中央館、医学系分館、薬学部分館において業務を行っている。中でも、1973（昭和 48）年に建築された中央館は老朽化が進み学習環境・資料の保存環境の悪化を招いていたが、2012（平成 24）年度に耐震補強を主とした改修が実施されることになり、築後約 40 年を経て施設設備の環境が改善されることとなった。

この度の中央館改修を機に、学生及び教職員はもとより社会からのニーズに応えるため、本学の「総合情報環構想 2010」に沿って、大学や社会の変化を踏まえ、現在及び将来の図書館に何が求められているかを検討し、附属図書館の基本的な運用計画を策定することとした。

はじめに

図書館を取り巻く環境の変化として、近年のインターネットの普及や ICT（情報通信技術）の発達に伴い、電子図書館の構築など図書館の高度情報化のニーズが高まっている。さらに今日では、スマートフォンやタブレット端末を使用した情報の収集や資料の作成をはじめ、ソーシャルネットワークによる交流、オンラインブックの利用等、これまでにはなかった新たな環境も充実してきた。これらをはじめ、学生や社会人（一般利用者）の多様な学習ニーズに対応するためには、大学図書館の新たな機能として、静謐な個別の学習空間だけではなく、グループでデジタル情報と紙情報をシームレスに使い、種々のサポートも受けられる新しい学習空間も備える必要性が認識されるようになってきた。一方、教員等研究者へのサポートとしては、従来の図書館機能を保持したうえで、研究環境と研究方法の変化に対応した新しいサービスを提供しなければならない。そのほか、学外の研究者及び地域社会への情報提供と知的・文化的サービスを一層充実させるため本学所蔵の資料の電子化及びその公開を進めるとともに、他機関等との連携を図りながら資料を充実させ展示等を実施していくことも必要である。更に、留学生や外国人研究者の増加に伴う国際化に必要な環境整備や社会に開かれた図書館として積極的な情報発信を行うことが求められている。

今回の改修にあたっては、閲覧・学習席を中心とする「静」の空間とラーニング・コモنزという「動」の空間の共存・すみ分けに十分配慮し、併せて「蓄（アーカイブ）」の質量を維持・発展させながら、図書館のこれまでの実績や新たなニーズを踏まえつつ、新時代の図書館にふさわしい以下のような機能の実現と意義ある諸サービスを提供するものである。

1. 「学習支援」機能

(1) ラーニング・コモنز

2010（平成 22）年 12 月、文部科学省科学技術・学術審議会は「大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像－」の中で「大学における教育に関しては、学生は授業を受けるだけでなく、より自発的な学習や実践の必要性が重視されてきており、大学図書館にもその支援の『場』の提供や図書館職員等による学習支援が期待されている。さらに、学生にはインターネット等の情報環境に対応できる知識やスキルを身に付けることが求められている。」また、「最近の大学においては、学生が自ら学ぶ学習の重要性が再認識され、その支援を行うことが大学図書館にも求められている。近年、整備が進められているラーニング・コモنز、図書館職員等によるレファレンスサービスや学習支援は、このような要請に応える方策といえる。」とまとめている。

今回の改修により設置したラーニング・コモنزは、これを実現するものであり、複数の学生が集まって、電子情報資源も印刷物も含めた様々な情報資源から得られる情報を用いて議論を進めていく学習スタイルを可能にする「場」を提供するものである。その際、コンピュータ設備や印刷物を提供するだけでなく、図書館職員等が、それらを使った学生の自学自習を支援することも重要である。

ラーニング・コモンズは「スーパーアクティブエリア」「グループ学修室」「ライティングサポートエリア」を主な構成要素とする。

1) スーパーアクティブエリア

- ① 学生が行うブレインストーミング(その前のアイデアの揺籃期のための活動を含む)、討議、プレゼンテーション、ゼミ活動といった「動」の要素を認め、むしろ奨励する場としてスーパーアクティブエリアを設ける。利用者(テーブル)間は十分な間隔を置き、学生(グループ)間がお互いの妨げとならないよう配慮する。デスクトップPCを設置すると共に、無線LANの環境を整備し、PCの持ち込みを認め、学習の段階(テーマを決める、リサーチする、構成を考えるなど)、個人・グループの別など利用における自由度の高いエリアとする。
- ② ラーニング・コモンズの発想からは「(熱が入って)にぎやかになる」ことをも認めるのが基本であるが、スーパーアクティブエリアが「うるさくなる」「他のグループや個人の妨げになる」ことのないよう施設・設備面で対応すると共に運用ルールを作り周知・徹底を図る。

2) グループ学修室

- ① 2012(平成24)年、文部科学省は学士課程教育の質的転換を求め、次のように報告している。「予測困難な時代にあって生涯学び続け、主体的に考える力を持った人材は、受動的な学修経験では育成できない。求められる質の高い学士課程教育とは、教員と学生とが意思疎通を図りつつ、学生同士が切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する課題解決型の能動的学修(アクティブ・ラーニング)によって、学生の思考力や表現力を引き出し、その知性を鍛える双方向の講義、演習、実験、実習や実技等の授業を中心とした教育である。」

グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等学生のグループ学習やプレゼンテーションの練習に加え、教員によるセミナーの開催などの利用により、課題解決型の能動的学修(アクティブ・ラーニング)を可能にする場として、グループ学修室を整備する。図書館の多様な資料、インターネット環境に加えて、プロジェクター等の機器を整備することによって、こうした学習を支援する。また、学生たちによる、また教員による、あるいは教員と学生による研究会、読書会等の活動を積極的に受け入れる。

3) ライティングサポートエリア

- ① ライティングサポートエリアは、学生や大学院生のライティングおよび関連スキルのサポートというミッションとともに、グループ学修室などと同様に、教員が図書館の持つ利便性(専門辞書類や参考文献の使いやすさなど)を活用した授業に利用することを積極的に受け入れるものとする。
- ② 図書館内のライティングサポートエリアにライティング指導コーナーを設置し、大学教育機能開発総合研究センターのライティング指導員等による指導によって、学生のレポート作成支援の強化が期待できる。

- ③ 学生へのグループ指導や個別面接指導、またライティング短期講座の開催や授業など多様な指導方法に対応可能とするため、ライティングサポートエリアは同一フロアの他のエリアとは音環境として隔離された空間となるよう配慮する。
- ④ グループ指導のため、あるいは個人指導のため、ほかの利用者からの干渉を受けず集中して指導を受けられるような独立性の強いスペースを確保する。
- ⑤ 図書館が有する多様な資料がシームレスに利用出来ることでライティングサポートの効果を高めることを期待するものである。また、図書館職員等による指導支援も視野に入れ、既存のライティング指導室との連携を密にして、ライティングサポートの業務がねらい通り遂行されることを目的とする。

(2) 個別学習空間

学生アンケートの結果から、4人掛け机(テーブル)の使いにくさを指摘する声が少ないことが明らかになった。中央館の利用が多い学部学生にとって中央館は様々な科目で課されるレポート作成のためのノウハウの習得と実際の情報収集、語学などの予復習、一般図書や新聞を読むこと、PCを利用し文献検索を行うこと等利用内容や形態は多岐にわたる。このような個々の学生の多様な学習形態に対応するため、個別の学習空間を大幅に増設することにより学生にとって図書館での学習は取り組みやすく、また魅力的なものになると考える。

また、特に静謐な個別学習空間としてスーパーサイレントルームを設置する。

2. 「研究支援」機能

(1) 従来の研究支援の継続と新たな研究形態などへの対応

文献の貸し出し、取り寄せ、複写、また電子ジャーナルに関するサービスの提供といった従来の研究支援に加えて、研究形態の変化に対応した新しいサービスの提供を検討する。本学の教員が代表を務める共同研究プロジェクトに関して、図書館の持つアーカイブ機能の柔軟な利用の提供、また図書館を研究会の場とし、所蔵する文献などの利用をいっそう容易に(また柔軟に)することで共同研究推進を支援することなどが考えられる。

(2) 来学する研究者等への対応

学外の研究者等へ当館が所蔵する貴重資料等を開示することは、研究支援のための図書館の重要な役割である。研究者等が貴重資料を広げて調べたり、数人規模のゼミを行ったり、海外その他の来賓や報道関係者に披露したりできる部屋として資料閲覧室を配置し、研究支援への取り組みを一層充実する。

3. 「蓄(アーカイブ)」機能

(1) 購入・配置する図書の選定等

中央館で購入・配置する図書は、図書館職員による選書に加え、学生のニーズに即した蔵書構成を確立し図書館利用の促進を図ることを目的として、2007(平成19)

年度から学生選書員を募集して学生用図書を選書を行っている。今後も、より多様な選書や電子ブックのタイトル数の充実を行い、また電子ブックの閲覧に適したデバイスの提供についても検討する。

(2) 資料・文献の検索方法のシームレス化

2012（平成 24）年 10 月から「次世代 OPAC」を導入し、従前と比べて格段に資料・文献の検索方法のシームレス化が進んでいる。蓄えられた資料の有効な利用方法について今後も引き続き検討を重ねる。

(3) 資料保存環境の維持拡充と資料の電子化

全学的なスペースの不足を背景に、近年教員の退職や転出も重なり、研究室等へ貸し出している資料を附属図書館へ返却したいとの申し出が相次いでいる。図書館で所蔵する資料保存に適した館内環境を今後とも維持することが不可欠であると共に、保存スペースの拡充が重要となっている。今後とも貴重資料を含む図書館所蔵資料の保管環境の整備を一層進めるとともに、代替が不可能な資料については早急に電子化を推進しなければならない。加えて、電子ジャーナルにおけるアーカイブの整備も必要である。現在、学術出版の分野では電子媒体が必須のものとなっており、データ保存のための環境整備にも取り組まなければならない。

(4) 学生のニーズに合ったロビー展示等の実施

2007（平成 19）年度から、学生の図書離れ防止と図書貸し出し増加を目的としてロビーでの企画展示を行っているが、今後も学生の意見を取り入れることなどの試みと共に創意工夫を重ねて学生のニーズにあった展示・企画を継続的に実施することとする。展示等のためのスペースや書架等は今後も確保していく必要がある。

4. 「市民・地域へのサービス」機能

(1) 所蔵資料の市民の利用サービスの維持

地域社会への貢献の観点から 1991（平成 3）年度から一般市民に図書館を開放し、閲覧及び複写サービスを行ってきた。更に試行を経て 2000（平成 12）年度からは、貸し出しも行っている。常に一定の利用者があり、特に休日・夜間に多くなることから地域への貢献に役割を果たしており、今後も継続していく必要がある。

(2) 図書館主催のイベント等

図書館では、地域への文化貢献の一つとして、1984（昭和 59）年度から毎年、秋の学園祭の時期に合わせて貴重資料展及び講演会を開催し、多数の来場者を集めている（平成 23 年度第 28 回の実績：貴重資料展 214 名、講演会 90 名）。このような実績を踏まえつつ、市民・地域の新たなニーズに配慮しながら、今後も魅力ある、新しい企画にも取り組むほか、市民向けに特化した講演会や市民講座の開催等も検討する。

(3) 公共図書館との差異化：大学図書館としての特色のアピール

多岐にわたる学術的な文献、また貴重資料や文献を所蔵する大学図書館としての魅

力を、機会をとらえてアピールしていくことが必要であり、公共図書館には所蔵されていない特色ある資料を市民に紹介することにも、さらに積極的に取り組む。

(4) 熊本大学学術リポジトリによる学術成果の発信

図書館では、本学構成員が執筆した学術成果を熊本大学学術リポジトリにおいて恒久的にアーカイブし、広く社会に発信している。教員の論文アーカイブ作業をサポートするとともに、研究成果を広く社会に発信することで、社会貢献を進めていく。

5. その他

(1) 図書館運営への学生の参加

図書館運営（サポート）に関わる学生を募集し組織化することを検討する。これらの学生は、前述の学生選書制度に携わることや図書館への意見等の提言などを行うほか、希望により図書館業務のサポートにあたることもできることとする。利用者の目線による発想を元に新しい企画へと展開することを期待する。

(2) 多目的ラウンジの設置

英語読本の配架に隣接してAV機器を配置して語学学習に適したスペースを確保する。また、就職活動にも利用できる資料を集中して配架するなどくつろいだ雰囲気でも多目的に利用出来るようなラウンジを設置する。

(3) デジタルサイネージ設備

図書館企画のお知らせや利用者への連絡、館内放送と共に視覚的な表示を行うこと等を目的としてデジタルサイネージ（電子看板：表示と通信にデジタル技術を活用してディスプレイによって映像や情報を表示する広告媒体）を設置する。学内各部署の情報を図書館に設置しているデジタルサイネージへ表示することもできるようになり、図書館利用者へのきめ細かな情報提供が可能となる。

(4) アメニティの確保

閲覧スペースは、快適な温湿度や十分な照度を得られるように配慮する。滞在型（長時間）の利用にふさわしい休憩のためのスペースとして、リフレッシュルームを館内に配置する。

(5) アクセシビリティの確保

適切な資料配置を検討し、館内のサイン計画を行う。利用者動線を検討し、ユニバーサル・デザインを考慮した施設として整備する。

(6) セキュリティの確保

緊急時の利用者・職員の避難経路を確保するとともに、避難経路のわかりやすい表示を行う。安全のための警報装置、監視装置を必要な箇所に設置する。火災・地震等の災害発生時においても利用者の安全確保と共に資料の保全に努めるなど、資料のセキュリティを確保する。

おわりにー今後の課題

今回の改修により附属図書館の機能は高度になり、利便性はいっそう高まることが期待される。しかし、学生数、教職員数に比して中央館は依然として十分な規模を備えているとはいえない。今後も蔵書数は増加し、各部局に貸し出してある図書・資料の返却が続くと予想され、中央館の蓄機能ではこうした事態に対応することがむずかしい。

また、本学は重要文化財の阿蘇家文書をはじめ多くの貴重資料を所蔵し、公益財団法人永青文庫より「細川家北岡文庫古文書」として膨大な書籍と史料の寄託を受けている。永青文庫史資料は現在文化庁において文化財として国指定の作業が進められている。指定の後には、それにふさわしい管理が求められることになろう。これらを収納し、調査研究・展示までを行える高度な機能を備えた施設が必要になってくる。

このような近い将来を見通す時、中央館の収蔵設備の規模の拡充と質の向上は喫緊の課題といわなければならない。改修が終わった後、ただちに中央館の増築について検討を開始することが望まれる。

以上